

モラロジー研究会 開催報告

モラロジー研究推進プロジェクト

令和5年5月24日(水)、生涯学習センター(研修館201教室)にて、「廣池千九郎が後世に託した34項目の研究課題の検討 その1-意図と課題を中心に」をテーマに、研究会を開催しました。モラロジーの維持員、研究員、職員あわせて、20名ほどの参加となりました。

冒頭で、当研究推進プロジェクトのリーダー・宮下和大(道科研主任研究員)が趣旨説明を行い、続けて、プロジェクトメンバーの宗 中正(サブリーダー、道科研教授)、宮下和大、竹中信介(コーディネーター、道科研研究員)、アブドゥラシィティ・アブドゥラティフ(コーディネーター、道科研研究員)の4名が報告しました。それぞれの報告テーマと要旨は、以下のとおりです。

①宗 中正「廣池千九郎が提示した道徳科学の研究と普及の構想について - 『道徳科学の論文』第三緒言から -」

「はじめに、大正15年12月に『モラル・サイエンス』(謄写版)に記された「第一緒言」が、昭和3年7月4日に訂正を完了した『道徳科学の論文』の「緒言」(第一から第三)においてどのように再構成され、加筆されたかについて述べました。その上で、道徳科学の研究と普及について廣池が、①この研究は困難であるが人類の平和と幸福のために不可欠である、②研究範囲が広くまた対象が複雑微妙であるので多大の時間と労力を要する、③この研究の成果を世界に普及させてモラロジー建設の目的を達成するには、真理を愛好し自ら品性の向上を求める後進学者が必要である、④研究と教育を一体のものとして進めていく必要がある、と考えていたことを述べました。」

②宮下 和大「34項目の記述内容の確認」

「34項目にわたって記述されている実際の文言に見える独特の表現や文句(たとえば「生命の連絡」や「自然力」「社会感化力」など)について『道徳科学の論文』全体を参照しながら、その表現や文句が意味するところを確認するとともに34項目そのものの記述内容の確認と共有を行ないました。また、研究項目の内容に関して『道徳科学の論文』内でどのように触れられているかについても確認・共有して、なぜこの研究項目を挙げたのかという意図を見通すための基礎となる部分を提示しました。」

③竹中 信介「34 項目の研究課題の検討 ―先行研究及び学問的変遷の概略―」

「本報告では、まず「34 項目の研究課題」自体の観方や扱い方について、『モラロジー研究』誌掲載の諸論考を参考にレビューしました。次に、34 項目との関わりが深いと考えられる道科研内外の文献を「資料篇」として紹介し、廣池千九郎没後の学問的変遷の概略を明らかにしました。特に、「Eugenics=人種改良学(現在は優生学)」や「進化論」についての廣池の見解を、当時の時代状況の把握とともに検討したあと、現代の学問的視点からは何が言えるのか、「人類の幸福増進」を一つの視角として「エンハンスメント」の議論を検討しました。」

④アブドゥラシィティ・アブドゥラティフ「研究課題第 30 項目の「移民問題」について」

「本報告では、「34 項目の研究課題」の第 30 項目である「人口問題・食糧問題・移民問題及び道德の相互関係における研究」について、大正、昭和初期の移民の動機に関する先行研究と『モラロジー研究』を参照しながら、廣池博士が考えた「移民問題、道德との関係」についてレビューしました。

廣池博士は当時の時代背景にある日本国内から海外への日本人移民の「排斥問題」に注目して、また、その解決策は道德教育に求めたと考えられますが、現代日本の（内外）移民において、廣池博士の問題意識をどう捉えるか、モラロジーがどうかかわっていくか、移民問題と道德の相互関係についてさらに探っていく必要があることを提起しました。」

全体討論と質疑応答のパートは、34 項目の研究課題の内容を掘り下げる議論のほか、モラロジー研究全体における「34 項目の研究課題の位置づけ」の確認、現代的諸問題の取り扱い、今後の道科研内での取り組みの方針などについて意見交換する場となりました。

今年度は、今回の研究会での議論をもとに、さらに、これまで蓄積されてきた 34 項目に関わる先行研究を整理するとともに、特に「自然科学」と「社会科学」分野の学問的変遷について検討する研究会を開催する予定です。

以上